

現代ラオスにおける伝統染織

——市場化・国際化の受容とその影響

伊藤 渚

比較人文学専攻・文化人類学専門 前期課程1年

1. 調査の目的と方法

本調査の目的は、今まで明らかにされてこなかった、ラオスの首都ビエンチャンとその周辺における現在の伝統染織のあり方を明らかにすることである。特に、首都ビエンチャンを中心に活発化している手織物産業に注目し、このビジネスを成り立たせているものが何であるか、その概要を明らかにすることを主たる目的として調査を行った。

より具体的には、国際市場経済の中で形づくられたラオス染織のイメージが、ラオスの伝統染織をどのように変化させ、現在のラオス染織を形づくっているのか、染織の担い手は、染織技術をどのように獲得しているのかを、織物生産のネットワークと関連づけて解明することが本調査の目的である。

調査期間は2007年8月18日～10月12日で、ビエンチャン市内及びその周辺の市場、ギャラリー、工房、

職業訓練センターにて、参与観察と聞き取り調査を行った。

2. 調査地概要

ラオスの染織は2度の大きな変容を経験している。最初は1960年代の内戦やベトナム戦争である。この混乱期に起きた北部からの人口移動は、地域固有の伝統的な織柄をビエンチャン平野の織物のモチーフソースとした。2度目の変化は1986年の市場開放以降で、特に90年代以降国際的な評価を獲得したラオスの染織品は市場経済の中で売買されるようになった。

かつて家族のために織られていたラオスの手織物は、海外からの需要に応え、急速に市場化しつつある。しかし、女性によって営まれ継承されてきた染織技術は、布が商品化した今も、生産から販売まで、主にラオ＝タイ系諸族の女性によって担われている(表1・2)。

ラオス人民共和国には、これといった産業がなく、手工芸、中でも、テキスタイルは最も盛んな産業のひとつであり、主要な輸出品である。1998年に創設されたラオス手工芸協会の初代代表は染織工房Nのオーナーであった。その後、8年間、工房Pのオーナーが代表を務めたのち、現在は工房Nのオーナーが再び代表を務めている。また、同協会に現在登録している団体130のうち、テキスタイル部門に属する団体は65と半数を占めている。

このように、いまやラオスの「ビッグ・ビジネス(工房Pオーナー)」に成長した手織物産業であるが、その売り上げの8割以上を占めるのは輸出である。

ビエンチャンとその周辺の村は、そうした手織物の集積地である。ギャラリーや工房、市場が集まり、地方で作られた布はここへ運ばれ販売されるし、工房で働く織子たちは地方からビエンチャンへと出稼ぎに来る。このように、ラオスの手織物産業は、ビエンチャンを中心に、地方ービエンチャンー外国というネットワークを形づくっているのである。



ラオス全国地図

表1 工房とそのオーナー

名前	工房基本情報		オーナー				染織技術	
	所在地(支店)	設立年	性別	年齢	民族(国籍)	出身地	本人	母親
工房P	ビエンチャン特別市	1993	F	45	赤タイ	サムヌア	○	○
			F	42	赤タイ	サムヌア	○	○
工房N	ビエンチャン特別市	1990頃～	F		低地ラオ	サワンナケット	×	○
工房M	ビエンチャン特別市	1995(1992)	F		華人(ラオス)	タイ	△	×
工房K	ビエンチャン特別市		F		低地ラオ	ビエンチャン	×	?
			M		タイ・プアン	シェンクワン	○	○
工房S	ビエンチャン特別市	2005(1996)	F/M	34/34		サムヌア	○	○
職業訓練センターH	ビエンチャン特別市	1998	F	—	—	—	—	—
工房H	ビエンチャン特別市、サラワン県	2006(1990)	F	40	低地ラオ	サラワン	○	×
工房I	ビエンチャン特別市(ルアンパバン市内)	1998	F					
工房L	サワンナケット県(ビエンチャン特別市、)	1999	F			サワンナケット		
			F/M		日本人	—	○	—
工房T	ビエンチャン特別市	1997?	F		低地ラオ	(ビエンチャン?)	○	?
工房C	ビエンチャン特別市		F				△?	○
工房A	シェンクワン県(ビエンチャン特別市、ルアンパバン市内)		F					

表2 工房

名前	従業員(内男性数)			売上			染色		糸	
	在工房織子	在宅織子	染色など	年間平均	輸出	主な輸出	天然	化学	絹	木綿
工房P	130	120	26(26)	30万\$	95%	日本(内60~70%)	○	△	○	○
工房N	48	50	6(6)	12万\$	80%	欧米	○	×	○	○
工房M	64	0	21(1)			特に無し	△	○	○	
工房K	10?	45	3?		不明	特に無し	○	○	○	×
工房S	30強	0	2(1)		80%	タイ?	○	○	○	○
職業訓練センターH	15	0	2(2)		—		○	×	○	○
工房H	0	?	オーナー		—		○	×	○	○
工房I									○	
工房L	0					日本(全体の約50%)	○	×	×	○
工房T	10	0	オーナー				○	×	○	
工房C	約30								○	

3. 染織技術の特徴

i. 織の特徴

写真1は、ラオス北部の、フアパン県サムヌア地方で織られた布である。このような浮き織りは、ラオスの染織品の特徴のひとつといえる。こうした織物は、写真2のような高機で織られる。ラオスで広く用いられているこうした高機の大きな特徴は、紋綜統(写真3)があることである。紋綜統は緯浮織(Chok)に用いる。その仕掛けは、経糸を機にかけてから、模様を入れる際に持ち上げる経糸を、1羽(箆の同じ羽=隙間に入れる経糸)単位で拾って作る(写真4)。織る際、仕掛けの竹ひご(もしくは糸)に従って持ち上げる経糸を分けて持ち上げ、そこに別糸を入れて模様を織り出す(写真5)。仕掛けの数は模様によって異なり、まず上から下へ、順番に竹ひご(糸)を移し、すべて下へ移ったら今度は下から上へ移しながら織っていく。日本の綴織と同様、織手が見ている機の上

は布の裏であり、裏を見ながら織っていく。また、この機には一般に「ち巻」が無く、織手の頭上で竹節を用いて糸を止め(写真6)テンションを調節する。

このように、縦糸のテンションを自在に調整できる機により、経や緯に自在に別糸を入れ込むことができ、そのため、モチーフの絵画的な表現が可能となっている。浮織には、緯浮織(Chok)の他に、経浮織(Muk)があり、また緯糸に別糸を入れ込む綴織(Kiyap Chok)(写真7)や、糸を先染して模様を表す緯緋(Mat Mii)(写真8)を確認した。

なお、整経は整経台を用いた平整経であった。

また、各種のモチーフは伝統的に各地に伝播し、また模倣されてきたのだが、近年の市場化や援助活動によって、地域差・民族差はますます希薄になっている。

技法も、モチーフと同じく、地域差・民族差は希薄になっており、ラオ=タイ系諸族の間では均質化が進んでいると感じた。また、道具も綜統と箆のセットを



写真1



写真2



写真3



写真4



写真5



写真6

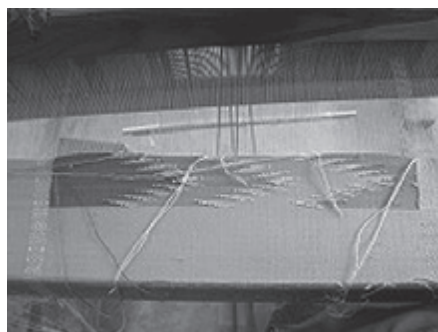


写真7

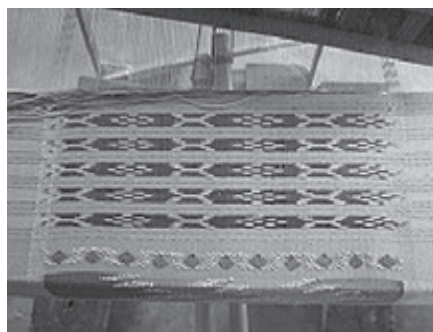


写真8

のぞいて自作することが多く、織子にきいても、特に差異は感じていないようだった。実際、ビエンチャン周辺の工房で観察された道具とその使用法は、90年代前半にシェンクワン地方を調査した柳の報告とほぼ一致した（柳，1991・1994・1995）。

ii. 染色の特徴

色糸の入手には以下の3つのパターンがある。

1) 輸入品である色糸を購入する。

2) 原料糸を購入し天然染色する。

3) 原料糸を購入し化学染色する。

家庭で個人が織る場合は1)もしくは2)、織子を雇用して工房を組織している場合は2)もしくは3)である。化学染色はラオスには浸透しておらず、糸を染める場合は主に天然染色で行われることが多く、また、それが推奨されている。

天然染色の主な特徴は以下のとおり。

1) 糸を灰汁で煮て精練する。

2) 精練した糸を、濃い染液に浸して一気に色を吸収させる。

3) 必要に応じて、明礬石や鉄分、灰汁を加えて色を定着させる。

4) 発酵藍（泥藍）による染色がある。

現在行われている天然染色には、鉄漿の使用など、女性への技術指導などの援助活動を通じた日本からの技法の流入も見られる。また、ビエンチャンの工房では、なるべく経験に頼らずに染色が行えるよう、工程を数値化している。

なお、染料と薬草の共通性はラオスでも見られるようだ。

4. 工房とそのオーナー

ラオスの手織物産業では、文字通り、手織りで布が作られている。いくつかの工房で、将来ラオスの織物は機械化されると思うかどうかたずねてみたところ、「原料が十分ではなく、かつ莫大な金銭的・時間的投資が必要なので、されないとと思う。それに、雇用機会がなくなるなどマイナス面も多く機械化されない方がよいので、政府がそのような開発計画を後押ししないことを願っている。」(工房Pオーナー)や、「されたとしても、私は、手工芸を守っていく。安い大量生産品がよければラオスではなく他の国へ行けばいい。手工芸を守っていきたく思ったからこそ、私は協会を立ち上げた。」(工房Nオーナー)といった回答を得た。

また、ラオスでは天然染色が積極的に採用されている(表2)。その理由を尋ねてみると、「オーガニック」(工房Nオーナー)、「伝統、環境、そして人気がある」(工房Pオーナー)、「安全で手に入れやすく、かつ将来性がある」(職業訓練センターHオーガナイザー)、「それが本来の伝統的なラオス染織のあり方だから」(工房K)などの答えが返ってきた。天然染色の技術で「丈夫で色落ちしない布」を実現するのは現状ではまだ困難だが、天然染織を求める顧客が多いのは事実であり、工房のオーナーたちもそれを知っているのである。

このように、工房オーナーは、手織ること・天然染色することの価値とその需要を十分意識しているといえる。

こうした工房のオーナーたちは、みな大卒以上の高学歴者である。輸出に支えられている現代ラオスの手織物産業で成功するには、海外での需要を理解し顧客

を開拓するため、外国とつながる窓口を持つ必要があり、その条件を満たすのは、大学を出ることのできるクラス以上の人々なのである。オーナーには、外からの眼差しを受け止め、伝統染織を現代的なセンスや使用に耐えるものにするプロデュース力と、テキスタイルを含めた「ラオスの文化」の価値を再発見し積極的に伝えていくことの両方が求められている。ラオスの文化を伝えるための博物館や文化センターを作ったり(工房K)、「本物のアーティストを育てるため」の、「よりプロフェッショナルな」テキスタイルを学ぶ学校を作ろうと計画したり(工房P)、ラオスの染織に関する本を出版したり(工房P、職業訓練センターH)する工房があるのも、現在の手織物産業のあり方と矛盾しないといえる。

また、成功している工房オーナーは、「いいものを作る」こと、品質の重要性を認識しているし、そのためにはよい材料が不可欠であることもわかっている。だから、多くの工房は、原材料を市場で買うのではなく、独自のルートから購入している。しかし、糸や染料といった原料を供給するのは地方であり、生産者の多くは、工房オーナーと品質についての認識を共有しているわけではない。特に糸には問題が多く、品質のよい糸を入手するのに、どの工房も苦勞している。そのため、自ら糸の生産に取り組んでいる工房もいくつかある。

一方、ラオス社会において比較的裕福な階層に属する工房のオーナーたちには、従業員を丸抱えして面倒をみるのが求められている。オーナーと従業員の関係は、雇用者-被雇用者の契約関係というより、相互扶助の理念に基づく親族関係に近い。実際、自らの経済活動の目的を純粋な利益の追求とはみなしておらず、雇用や原料の買取りによって人々に現金獲得の手段を提供し、彼らの生活を向上させる開発援助活動なのだとも考えている工房オーナーも多い。

5. 工房で働く織子たち

織子の仕事は、与えられた糸やデザインをもとに布を織ることである。彼らは、出来高に基づいて賃金を得る給与所得者で、月収は技量によって変わるが、50\$~100\$程度であるようだ。

従業員の中でも、織子はすべて女性で(表2)、高校を卒業後、18歳前後に、地方から出てきた者が大半である。彼らの大半は北部出身で、中でもサムヌア(フアパン県)出身者が多く、続いてシェンクワン、

表3 織子の一日(1) (工房P)

5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	
未確認			仕事				昼食・ 休憩	仕事 (15時頃 おやつ)				残業	未確認							

表4 織子の一日(2) (職業訓練センターH)

5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
	起床	朝食	仕事				昼食・ 休憩	仕事 (15時頃 おやつ)				夕食・ 水浴	水浴・自由時間 (おしゃべり、 TV、髪染)				就寝		

ルアンパバンと続く。また、織子はすべてラオ＝タイ諸族の出身で、モン族やカム族、アカ族など、それ以外の少数民族出身の者、ベトナム人や中国人の織子には出会わなかった。

彼らは、ビエンチャン市街周辺にある親戚の家を頼って地方から出てきて、親戚や友人の紹介で働き口を見つけるのが一般的である。そのため、同じ工房に、兄弟姉妹で働いていることも多く、中には、後に父母もビエンチャンに出てくるというケースもある。

織子たちは、実家で母親から織を教わっていて、ビエンチャンに出てきた時にはすでに織技術を習得済みである者が大半である。しかし、母親から教わらなかった未修得の織技法もあるので、できる織技法は織子によってまちまちのようだ。工房で技法を教わりながら働いている織子もいるが、給料が出来高払いであることもあってか、大半は母親から教わった技法でできる仕事をしている。

勤続年数は、短い者と長い者に二分される。結婚して子供を持ち、家族生活がうまくいけば勤続年数も長くなる。子供ができると、在宅織子になるか、子供を保育園(月7\$)に預けて工房で働く。

表3・4は織子の毎日の暮らしをまとめたものである。仕事中は、音楽を聴いたり、おしゃべりをしたり、適当に息抜きもしていた。出来高払いであることから、仕事を休んだり早めに仕事を切り上げたりすることもあれば、休憩時間や就業時間後にも織を続けていることもある。

染織工房の多くは月曜から土曜まで開いている。織子たちは、休日の日曜日には、洗濯や買い物をするか、そうでないなら、親戚の家に行くなど家族親類と過ごすことが多いようだ。彼らには自分のシンを織る時間はないので、シンは市場や売り子から買う。村からシンを売りにやって来る女性を何人か見かけた。

6. まとめと考察

このように、現在のビエンチャンを中心としたラオスの手織物産業は、伝統的な社会や文化を下敷きにして成り立っているといえる。

製作する布はもはや伝統衣装ではなく、市場で受け入れられるような現代的なセンスにも耐えるデザインを採用する必要があるとはいえ、その染織技法は伝統的なやり方を踏襲しており、またデザイン自体も伝統的なモチーフが使用されることが多い。

一方、布生産を支える地方出身の織子や原材料の供給者は不可欠な存在だが、契約という考え方がまだ一般的ではないラオスにおいて、その供給を支えるのは伝統的親族関係に基づくネットワークであるようだ。

つまり、ラオスの手織物産業を成り立たせている主な要素は、

- 1) 外国人の顧客の需要
- 2) 原材料や作り手を供給する地方
- 3) 1)と2)を繋ぐ工房の経営者

の3つであるといえる。

手織物産業は、「地方ービエンチャンー外国」というネットワークを形作っており、知識階層に属し、外国との繋がりを持つオーナーが、外国からの眼差しと需要を受け止め、地方からの原材料や作り手の供給を受けて成立させているといえる。彼らは、天然染色や手織を自覚的に採用しており、また、天然染色や手織を、ラオスの伝統染織の重要な特長だと考えている。

高等教育を受け、外国に接し、顧客である外国人と考え方や感じ方も比較的近い「国際的コスモポリタン」的な工房オーナーたちは、ラオスのエリートであり、博物館や学校の創設・経営、本の出版などを通じて、テキスタイルを含めた「ラオスの文化」の価値を再発見し伝えていくことに積極的で、文化面でのリー

ダーをも自認しているといえる。

テキスタイルを中心に「ラオスの伝統文化」として融合しつつあるのは、ラオ＝タイ系諸族の文化・伝統である。その融合を推し進め、「伝統」の価値を再認識し、広めていこうとする活動の中心にいるのは手織物産業の経営者たちだといえるのではないだろうか。

参考文献

赤嶺綾子, 2001, 「ラオス社会における商業活動: ヴィエンチャン市内の手織物販売業の事例から」『龍谷大学経済学論集』40-5, 龍谷大学経済学会: 京都, 1-21頁。

小野昭彦, 1998, 「農村工業製品をめぐる市場形成——ラオスにおける手織物業——」『アジア経済』39-4, 財団法人学会誌刊行センター: 東京, 2-20頁。

柳 悦州, 1991, 「ラオス染織予備調査報告」『沖縄芸術の科学; 沖縄県立芸術大学附属研究所紀要』5, 沖縄県立芸術大学: 那覇市, 25-42頁。

——— 1994, 「ラオスシェンルアン村の織物調査報告」『沖縄芸術の科学; 沖縄県立芸術大学附属研究所紀要』7, 沖縄県立芸術大学: 那覇市, 91-106頁。

——— 1995, 「ラオス シェンコー地域織物調査報告」『沖縄芸術の科学; 沖縄県立芸術大学附属研究所紀要』5, 沖縄県立芸術大学: 那覇市, 57-73頁。